

否定疑問文小考

田野村 忠 温

要 旨

現代日本語のいわゆる否定疑問文にあっては、文字表記上は同一でも、相互に独立した別個の形式として区別すべき場合がある。また、別個の形式とまで見る必要はないにしても、一つの形式の中に下位類型を認めることが望まれる場合もある。否定疑問文はこうした意味で等質な存在ではないのであり、否定疑問文の形式と機能を考える上で、この事実の正しい認識を欠かすことはできない。

この小論においては、構文・音調・意味に関する種々の事実に基づき、否定疑問文の下位類型のあり方を検討する。得られる下位類型間の区別は、文末形式としての固定慣用化の程度の相違でもあり、疑問文中に現れる否定辞「ない」の機能の相違を反映するものでもある。

1 はじめに

いわゆる疑問文が否定辞を含む場合、その働きは、疑問と否定の複合という事実だけからでは予測できないものになることがある。これはもとより日本語の文法記述が基礎的な課題とすべき現象であると言ってよかろうが、この問題に関して形式と機能の両面に十分な注意を払いつつ考察した研究は今の所発表されていないように見受けられる。^{注1}

そこで、この小論においては、否定疑問文の形式と機能の対応のあり方を少しばかり探って見ることにしたい。

本題に入る前に、「否定疑問文」という語について、最低、次のことを明確にしておく必要がある。まず、「疑問文」とは、いわゆる終助詞の「か」で終わる文、および、「か」を伴ってはいないが文意に変化を来すことなく「か」を補うことのできる文を言うものとする。^{注2}ここで、「か」の機能が発問ということに限らず多岐にわたることは周知の如くであり、それ故、上の定義によれば、「疑問文」は機能的に種々のものを含むことになる。このことを確認した上で、「否定疑問文」を、主たる述語が否定辞「ない」を伴う疑問文と定義する。しかし、以下で見るように、一口に「否定」と言ってもやはりその機能は一様でなく、いわゆる否定の働きからはかけ離れている場合もある。このように、「否定疑問文」は、便宜的な性格の強い名称であり、形式的にも機能的にも多様なものを包含するものであることを予め明確にしておきたい。もっとも、裏を返せば、この多様性こそ、「否定疑問文」の問題を提起するものであることは断わるまでもない。

2 「ではないか」

問題がいささか複雑なので、先ずは、「ではないか」で終わる否定疑問文に限定して話を進める。以降、「ではないか」と記す時は、「じゃないか」「ではありませんか」等の文体上の変異形を含めて言うものとする。

2.1 結論的に述べると、「ではないか」には、意味のみならず構文・音調の上でも区別されるものとして、最低二類——この小論では三類と考える——のものを認めなければならない。ここに言う構文・音調上の区別が如何なるものであるかは追って明らかにすることとして、先ず、各類の「ではないか」の典型的な働きを簡単に例示しておく。(ここに示す用法説明は、各類に関して見当を付けるための目安であることを了解されたい。詳細は後述する。)

第一類の「ではないか」は、発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。「ない」を含むとは言え、前に来る表現の内容が否定されているわけではない。

よう、山田じゃないか。

何をする、危ないじゃないか。

自分から言い出したんじゃないか。

第二類の「ではないか」は、推定を表現する。この場合も、話者は前の表現の内容を否定してはおらず、寧ろ、それを認める方に傾いている。(以後、文例の末尾の「？」は文末音調の上昇を表すものとする。)

(不審な様子から) どうもあの男犯人じゃないか？

(空模様を見て) 雨でも降るんじゃないか？

第三類の「ではないか」においては、「ない」が否定辞本来の性格を発揮する。

(1は素数でないことを教えられて) そうか、1は素数じゃないか。

(1が素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ。) 本当に1は素数じゃないか？

この場合には、意味的にも、一個の纏まりを有する部分として「…ではない」という否定表現を自然に想定することができる。第一類・第二類の場合と同じく「ではないか」の形をしているとは言え、終助詞「か」の接続する対象が「…ではない」の形の表現であるに過ぎないわけである。完全に分析的な表現であると言える。(表現が分析的であるとは、表現を小部分に分解した場合、その各小部分の意味を規則的に複合することで全体の意味が得られることを言う。「分析的」ということは、逆方向から見れば、「複合的」「構成的」ということに等しい。)

各類の「ではないか」を、順に「ではないか₁」「ではないか₂」「ではないか₃」のように表すことにすると、「ではないか₁」と「ではないか₂」「ではないか₃」との間には形式と機能の両面において著しい相違が認められる。このため、二者は文字表記上でこそ区別を持たぬものの、少なくとも現代日本語の共時的文法記述においては、相互に独立した別個の形式と見るのが適切である。これに比較すると、「ではないか₂」と「ではないか₃」の間の相違は小さく、結局、両者は連続するものであらうと思われる。以後、「ではないか₂」と「で

はないか₃」を一括して扱う際には「ではないか_{2,3}」と記すものとする。

因みに、「ではないか₁」と「ではないか_{2,3}」の区別に関しては、専ら一方の機能を担う形式を方言の中に見出し得ることを指摘しておくことができる。例えば、近畿方言の「やんか」「(や)がな」や岡山方言の「(じゃ)が」の機能は、「ではないか₁」のそれにほぼ等しい。これに対し、近畿方言の「と違うか」は、専ら「ではないか_{2,3}」の領域に重なるものである。ここで、疑問ということに関わりを持たない表現である「(や)がな」「(じゃ)が」が「ではないか₁」に機能的に相当するという事実は、「ではないか₁」が形の上では疑問文でありながらも機能的には疑問ということとの連関を実質上断ち切っていることの傍証とすることができよう。

以下、各類の「ではないか」について順次検討する。

2.2 「ではないか₁」は、「ではないか_{2,3}」と同様、一応は「で」「は」「ない」「か」のように形態的に分割できるとは言え、一個の全体としての纏まりが強く、内部構造の変更に対して厳格である。この点を含め、「ではないか₁」の構文・音調上の特性を整理する。

① 先ず、「ではないか₁」は体言または用言に接続する。これに対し、「ではないか_{2,3}」は体言に接続するのみである。ここで、「体言」とは、名詞に加え、いわゆる形容動詞の語幹、「の」を末尾に伴う節（例えば、「壊れているの」）等を含むものとする。^{註3}

例えば、「ではないか₁」は、「危ないじゃないか₁」「何だ、まだ誰も来ていないじゃないか₁」のように用言にも付く。また、「山田じゃないか₁」に対し、「やはり山田だったじゃないか₁」のような言い方もできる。^{註4}これに対し、「ではないか₂」の場合、「×こちらの方がいいじゃないか₂?」「(部屋が散らかっているのを見て)×泥棒でも入ったじゃないか₂?」「×今テレビに映ったの、山田だったじゃないか₂?」等はいずれも不可能である。「ではないか₃」についても同様である。

この①の特性だけでも、「ではないか₁」を「ではないか_{2,3}」から独立の形式と見る根拠とするのに十分だと思われるが、その他、次のようなことがある。

② 「ではないか₁」には、「ない」をタ形「なかった」にした言い方はない。これに対し、「ではないか_{2,3}」の場合には、「ではなかったか」が可能である。

例えば、「ではないか₁」の場合、「×ひどいじゃなかったか₁」「×そう言ったじゃなかったか₁」という言い方は、少なくとも普通にはされない。^{註5}これに対し、「ではないか_{2,3}」では、「今テレビに映ったの、山田じゃなかったか₂?」「今日誰か来るんじゃないか₂?」「(部下の捜査報告を聞いて)そうか、あの男は犯人じゃなかったか₃」のように、「ではなかったか」がごく普通に可能である。

③ 「ではないか_{2,3}」の場合には、「か」の前に「の」を加えた形「ではないのか」が考えられるが、「ではないか₁」ではこれが考えられない。

例えば、「ではないか_{2,3}」では、「どうもあの男犯人じゃないのか₂?」「そうか、1は素数じゃないのか₃」等が可能であるが、これに対し、「ではないか₁」の場合、「×よう、山田じゃないのか₁」のような言い方は存在しない。^{註6}

④ 「ではないか_{2,3}」の場合には、末尾の部分「～かな(あ)」「～かしら」とした言い方

が可能であるが、「ではないか₁」の場合には不可能である。

⑤ 「ではないか_{2,3}」の場合には、推量を表す「だろう」「でしょう」を加えた言い方「ではないだろうか」「ではないでしょうか」が可能だが、「ではないか₁」ではそれが不可能である。

以上、①から⑤までは、「ではないか_{2,3}」との対比において見た場合の「ではないか₁」の構文上の特性であった。(もっとも、②～⑤は、意味的な理由によるものとして理解すべきものかも知れない。) この他、記しておくべき「ではないか₁」の特性としては次のようなものがある。

⑥ 「ではないか₁」は、殆どの場合、下降音調で発音される。但し、下述するように、上昇音調を取ることがないわけではない。

⑦ 「ではないか」の「ない」の働きを考える上で重要な意味を持つと考えられるのが、「ない」の位置での音調のあり方である。

例えば、普通の否定文「私は田村ではない」では、音調の概略を示せば、

…タコムラデハ「ナヲイ

のようになり、「ない」の第一拍の所で音調が上昇する。このことを、「ない」に「プロミネンス」が与えられる、と表現することにする。^{註7}ところが、「ではないか₁」を含む「田村じゃないか」では、「ない」にプロミネンスは与えられず、

タコムラジャナヲイカ

となることが確認されよう。後述するように、「ではないか₂」でも「ない」にプロミネンスが与えられることはない。他方、「ない」が否定辞本来の機能を果たす「ではないか₃」においては、普通の否定文の場合と同様、「ない」にプロミネンスが与えられる。(もっとも、現象の性質上、どの類の場合にも、実際の発話には標準を外れた音調が稀に現れることを認めておかなければならない。)

⑧ 「ではないか₁」の「か」を略した形が可能である。但し、これは「ではないか_{2,3}」の多くの場合(しかし、全ての場合ではない)にも共通する。

⑨ 「ではないか₁」の「か」を「の」で置き換えた言い方が可能である。

例えば、「あら、山田さんじゃないの₁」。これは、一見、「ではないか₂」の「あの人、山田さんじゃないの₂？」(或は「じゃないか₃」の同様の言い方)に共通することのように思われるかも知れない。しかし、「じゃないの_{2,3}」は「じゃないのか_{2,3}」で換言できるのに対し、「じゃないの₁」ではそれが不可能だという相違がある。結局、「じゃないの_{2,3}」の「の」は「のだ」の「の」である(これは終助詞ではない)が、他方、「じゃないの₁」の「の」は終助詞の類に帰属するものと考えられる。表現の可能性を整理して示せば、次のようになる(終助詞の部分に下線を施す)。

山田じゃない { $\left\{ \frac{\text{か}}{\text{の}} \right\}$ }₁

山田じゃない (の) (か)_{2,3} (?)

以上、「ではないか₁」の構文・音調上の特性を検討した。最後に、「ではないか₁」の用法

(20) 否定疑問文小考

を分類・整理しておく。

先ず、発見した事態を、驚きや感慨の感情と共に表現する用法が認められる。話者にとって意外な事柄であることが多い。

よう、山田じゃないか。

なかなかうまいじゃないか。

何だ、まだ誰も来ていないじゃないか。

事態が相手の責任によるものである時には、相手に対する非難・叱責の感情を含意する。

何をする、危ないじゃないか。

おかげで服が汚れちゃったじゃない。

国語5点、算数10点、…、全然成績上がらないじゃないの。

電車行ってしまったじゃないの。

最後の例においては、電車が行ったこと自体は相手の責任によるものでないにしても、「オ前ガグズグズスルカラ乗り遅レタノダ」というような話者の気持ちが込められる。(そうでないとすれば、理不尽な八つ当りの発言であろう。)

以上の例で表現されているのは話者が今発見したばかりの事柄である。こうした場合に加え、話者はあることを既に承知している、または、ある意見を持っている——従って、意外な事柄ではない——が、相手にそのことの認識・想起を求める時にも「ではないか₁」が用いられる。ここでは、必ずしも非難等の感情は伴わない。

俺とお前の仲じゃないか、遠慮しないで言えよ。

ちゃんとそう言っておいたじゃないの。

元気を出せ、また次の機会があるじゃないか。

諺に言うじゃない、腹が減っては戦はできぬって。

少しぐらい話を聞いてくれてもいいじゃない。

最後に、「ではないか₁」は「～(よ)うではないか」の形で、相手を勧誘したり話者の意志形成を表明したりするのに用いられる。

さあ、行こうじゃないか。(勧誘)

(挑戦されて)受けて立とうじゃないか。(意志表明)

なお、上で、「ではないか₁」は下降音調で発音されるとしたが、「か」を伴わない「じゃない」は上昇音調を取ることもある。相手に同意や確認を求める姿勢の反映であろうか。

また新しい店ができるって言う噂じゃない？

皆で食事に行くとするじゃない？(スルト…)

ねえ、お父さんどうしたの？さっきからちっとも姿見せないじゃない？

2.3 「ではないか₂」の特性を、上述の内容との重複を避けて整理すれば、次のようになる。

⑤ 「ではないか_{2,3}」では「ではないだろうか」の言い方が可能であることは上述したが、「ではないか₂」の場合に限り、これを更に、「ではなからうか」「ではあるまいか」とすることができる。

⑥ 「ではないか₂」は、殆ど全ての場合、上昇音調で発音される。ただし、末尾が「～かなあ」「～かしら」である場合には下降音調にもなる。

⑦ 「ではないか₂」では、「ではないか₁」と同様、「ない」にプロミネンスは与えられない。例えば、「田村じゃないか₂？」は、

タコムラジャナトイカ？

と発音される。¹⁸

⑧ 「ではないか₂」でも「か」を略した形が可能である。但し、「ではないだろうか」の「か」は略せない。（「ではなからうか」「ではあるまいか」でも同様である。）

用法面に関しては、「ではないか₂」は推定を表現するものである。ただ、「らしい」「だろう」等と比べ、非断定的である。即ち、話者は推定内容を結論とすることに躊躇を覚えている。これは、疑問文の形式を取っていることと無縁ではないであろう。疑問の姿勢が専ら自分に向けられれば自問となり、相手に(も)向けられれば、判断の提起や同意の要請となる。

何かの間違いじゃないか？

(何が何デモ) これよりは少しぐらいましじゃないか？

雨でも降るんじゃないか？

新聞でも読んだら目が覚めるんじゃない？

(ヨク思い出セナイケド) 何か用事があるんじゃないか？

「～かな(あ)」「～かしら」では、自問への傾きが強い。そして、話者の利害に関わる事柄の場合には、願望や危惧の感情が含意されやすい。

どこか違うんじゃないかなあ。

明日はいい天気じゃないかなあ。(願望)

何か悪いことが起こる兆候じゃないかしら。(危惧)

なお、ここで「ではないか₂」に関して述べた事柄の多くは、「ない」を伴わない疑問文にもあてはまる。「もしかしたらあの男犯人か？」は推定の表現たり得るし、「本当にこれで大丈夫かしら」は危惧の感情を伴い得る。しかし、このことを指摘しただけでは、「ではないか₂」の問題が片付くわけではないことに注意されたい。疑問文の形式が一般に推定に用い得ることが事実だとしても、この事実自体は、「あの男犯人じゃないか？」のように「ない」を含みながらも推定の対象が否定命題にならないという事実を含意するものではないからである。このように非分析的な「ではないか₂」の内部構造の問題に立ち入る用意はないが、それにしても、せめてその非分析性を認識しておくことは重要である。

2.4 これに対し、「ではないか₃」は分析的な表現であり、「か」の接続する対象が「…ではない」の形の表現であるというだけのものである。「ない」が否定辞本来の機能を保っているということでもある。

⑦' このため、「ではないか₃」の「ない」にはプロミネンスが与えられる。例えば、「そうか、1は素数じゃないか₃」では、

…ソ「スコウジャ「ナトイカ

のように、「ない」の第一拍の所で音調が上昇する。

ただ、このプロミネンスに関しては補足しておくべき点がある。それは、名詞のアクセント型故に、「ない」に先行する（一拍化した）「じゃ」の部分で音調の下降が生じない場合には、「ない」の所で音調が更に高まるとは限らないということである。例えば、「そうか、鯨は魚じゃないか₃」を考えると、「魚（サカナ）」が平板型アクセントの名詞であるため、

…サ「カナジャ」「ナヲイカ

のように「ない」にプロミネンスを与える発音に加え、

…サ「カナジャナヲイカ

のように「ない」がプロミネンスを欠く発音も可能である。（両様の発音が厳密に区別されるものでなく、相互に連続するものであることは言うまでもない。）このように、平板型名詞の場合には、「ない」のプロミネンスの有無が中和される可能性があるわけである。

⑥” 文末の音調は、上昇と下降の両方が可能である。上昇音調では発問や反問、下降音調では話者の納得を表すことが多い。

⑧” 「か」の省略は、上昇音調で相手に対する発問や反問を表す場合に限り可能である。下降音調の納得の表現の場合には「か」は略し難いようである。

「ではないか₃」は、分析的な表現であり、否定疑問文に限定した視野からの説明は特に要しない筈である。が、念のために、「か」の用法を仮に三つの場合に分けて、文例を示しておく。（「か」の省略が可能な場合もある以上、「か」の用法と言うよりも、疑問文の用法とでもした方が正確ではあろう。）

まず、上昇音調にて、強い疑念を表出する場合がある。独語的に発せられることも、疑念が相手に向けられることもある。いずれの場合にせよ、疑念の表出は「か」の機能に負うものであり、「ではないか」全体の問題ではないことを強調しておく。

（1が素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ。）本当に1は素数じゃないか？

本当にお前が盗んだんじゃないか？

次に、下降音調で、納得を表現する場合がある。ここでも、納得を表す機能は専ら「か」に由来する。

（1は素数でないことを教えられて）そうか、1は素数じゃないか。

（捜査報告を聞いて）そうか、あの男は犯人じゃなかったか。

（コレダケ完全ナありばいガアルノナラ）やはりあの男は犯人じゃないか。

最後に、話者の強い見込みは伴わない中立的な発問の場合がある。文末音調は、上昇のみならず、下降も可能のようである。（この用法を最後に廻したのは、単に、反問や納得の方が「ではないか₂」との対比が明瞭だからである。）

（戻って来た捜査員に対し）どうだった、あの男は犯人じゃなかったか？

（アナタハ）アレルギー体質ではありませんか？

こうした文は、音調（特に、プロミネンスの有無）を変えれば推定の表現になる。このことは、「ではないか₂」と「ではないか₃」の連続性を示唆するものであるが、この問題はここでは不問に付すこととする。

2.5 「ではないか₂」の非分析性に関連して、次のことを確認しておきたい。

「ではないか₃」が分析的な表現だということは、「…ではない」という形の通常の否定表現に単純に「か」が加わったものとして理解すべきだということであった。例えば、「(ソウカ、) 1は素数じゃないか₃」は、構文的にも意味的にも、

[1は素数じゃない] か

の如き構造を有するものとして理解される。

さて、「ではないか₂」についても同様の解釈が可能ではないかと考えられるかも知れない。例えば、「(ドウモ) あの男犯人じゃないか₂？」の構造を、上例と同様、「あの男(ハ) 犯人じゃない」という否定表現に「か」が加わったものと見るわけである。

ところが、こうした見方が不相当であることは、「これよりは少しぐらいましじゃないか₂？」のような文の場合を考えて見れば明白である。この文は、専ら肯定的な環境で用いられる表現「少しぐらい」を含んでいる。このため、「ではないか₃」の場合に倣って解釈しようとする、

* [これよりは少しぐらいましじゃない] か

という、不可能な構造(「…」の部分)を含む構造を仮定しなければならなくなるのである。

結局、「ではないか₂」を伴う文の構造の自然な解釈においては、少なくとも意味的には、「ない」を含まない段階において一つの纏まりを認めることになる。上例に即して言えば、「これよりは少しぐらいましdeal」がそれである。ただ、非分析的な「ではないか₂」を伴う文の内部構造の問題は上述したように小論の目的とする範囲を越えるものであり、これ以上の追及は行わない。

3 形容詞・動詞を述語とする否定疑問文

「ではないか₁」は数々の点において「ではないか_{2,3}」と異なるものであった。結局の所、「ではないか₁」は——文体上の変異を許しはするが——分解し難い単一の文末形式と見るべきものだと思われる。

こうして「ではないか₁」を除外して考えると、「ではないか_{2,3}」に関する前節での考察は、体言を述語とする否定疑問文に関するそれであったわけである。そこで、今や残された課題は、形容詞や動詞を述語とする否定疑問文の検討である。即ち、体言を述語とする否定疑問文

山田じゃないか_{2,3}

山田じゃなかったか_{2,3}

の検討に相当するものを、今や、形容詞を述語とする否定疑問文

小さくないか

小さくなかったか

や、動詞を述語とする否定疑問文

壊れないか

壊れなかったか

(24) 否定疑問文小考

について行おうというわけである。

形容詞・動詞を述語とする否定疑問文の場合にも、「ではないか₂」と「ではないか₃」の区別に相当するものが一応は認められるとしてよさそうである。以降、形容詞・動詞を述語とする否定疑問文を、「形-ないか₂」「形-ないか₃」「動-ないか₂」「動-ないか₃」のように表すことにする(「小さくありませんか」「壊れませんか」等の文体上の変異形も含める)。非存在を表す「ない」は動詞「ある」と否定辞「ない」が複合したものと見得る(その証拠に、丁寧体になれば「ある」が現れて「ありません」となる)ので、存在・非存在を問題とする「ないか」は「動-ないか」に含まれるものとする。

なお、表記を統一するために、以後、従前の「ではないか」には名詞文であれば「名」を加えて、「名-ではないか」の如く表す。また、述語の品詞が問題とならない場合には、例えば、「名-ではないか₂」「形-ないか₂」「動-ないか₂」等を一括して、「第二類の否定疑問文」のように表現することにする。

3.1 さて、「名-ではないか_{2,3}」の構文・音調上の特性の多くは、「形-ないか_{2,3}」「動-ないか_{2,3}」にもそのままあてはまる。例えば、「～のか」「～かしら」「～だろうか」等の形が可能であることもそうであるし、文末音調のあり方や「か」の省略可能性もほぼ共通である。

「名-ではないか_{2,3}」と「動-ないか_{2,3}」の際立った相違は、後者においては、プロミネンスの有無の対立がない(かのように見える)ということである。例えば、「(ソナニ乱暴ニ扱ッテ)壊れないか₂？」の音調は次のようになる。

…コ「ワレヲナイカ？」

ところが、問題は「動-ないか₃」の音調である。「名-ではないか₃」では「ない」にプロミネンスが与えられたが、「動-ないか₃」では事情が異なり、「(相手の発言を受けて)そうか、壊れないか₃」は、

…コ「ワレヲナイカ」

となり、「ない」にプロミネンスが与えられない。文末音調の相違を別とすれば、上の「動-ないか₂」の音調と同一になるのである。(「壊れる」は起伏式動詞である。「泣く」「笑う」「着る」「する」等の平板式動詞でも、プロミネンスの有無の対立はない。ただ、上一段・下一段・サ行変格活用の二拍語の場合は「キ「ナイカ(着ないか)」「シ「ナイカ(しないか)」のように「ない」の第一拍の所で音調が上昇するが、やはり「動-ないか₂」と「動-ないか₃」に共通するものであり、プロミネンスと見ることはできない。)

「名-ないか」と「動-ないか」とではプロミネンスに関する性質が全く異なるかのように見えるのであるが、実はそうではないことが次の観察から理解される。今の「そうか、壊れないか₃」に「は」を加えて、「そうか、壊れはしないか₃」として見ると、

…コ「ワコレハシ「ナイカ」

のように「ない」のプロミネンスが「復活」するのである(プロミネンスは「ない」ではなく「しない」に与えられるとすべきかも知れない)。これに対し、「(ソナニ乱暴ニ扱ッテ)どこか壊れないか₂？」の場合には「どこか壊れはしないか₂？」として見ても、同様の復活は起きず、

…コ「ワコレハシナコイカ？」

となる。同様に、「(ドウモ気ニナルノダガ) あの絵傾いてないか₂？」と「(相手の発言を受けて) そうか、傾いてないか₃」を比較しても、前者は、

…カ「タムコイテナコイカ？」

となるのに対し、後者は「ない」にプロミネンスが与えられて、

…カ「タムコイテ「ナコイカ

となることが確認されよう。

このことから、「動-ないか₃」は抽象的な段階においては、「名-ではないか₃」の場合と同様「ない」にプロミネンスを与えられているのだが、動詞-助動詞連続のアクセント型によって打ち消されるために、実際の音調として実現する時には消滅しているものと解釈することが許されるであろう。

他方、「形-ないか_{2,3}」の音調は「名-ではないか_{2,3}」の場合に準ずる。例えば、「この靴では少し小さくないか₂？」では「ない」にプロミネンスが与えられず、

…チ「イコサクナコイカ？」

となるのに対し、「(相手の発言を受けて) そうか、小さくないか₃」では「ない」にプロミネンスが与えられて、

…チ「イコサク「ナコイカ

となる。なお、「名-ではないか₃」の場合と同様、平板式形容詞の時にはプロミネンスの有無の区別が不明瞭になる。例えば、「そうか赤くないか₃」では、「ない」の所で音調は必ずしも上昇しない。

3.2 次に、「形-ないか₂」「動-ないか₂」の用法を整理しておく。

形容詞を述語とする文は、名詞を述語とする文と同様、人の制御できない事実関係を表すのが典型である。こうした場合、「形-ないか₂」は、「名-ではないか₂」と同様、推定の表現となる。

この靴では少し小さくないか？

そうする方がよくはないか？

勿論、「動-ないか₂」が推定を表すこともある。

あの絵傾いてないか？

今何か物音がしなかったか？

(ソナニ乱暴ニ扱ッテ) 壊れないか？

(コナ大キナ声デ話シテハ) 人に聞こえはしないか？

次のように「かなあ」「かしら」を伴う場合には、「名-ないか₂」の場合と同様、話者の願望や危惧を含蓄する傾向がある。

早く春にならないかなあ。(願望)

(ソナニ乱暴ニ扱ッテ) 壊れないかしら。(危惧)

しかし、ここでも、話者はいわば傍観者として舞台上の事の成行きに関心を寄せているに過ぎない。早く春になるか否か、壊れるか否かは、あくまでも話者の力の関与しない所で

決まるものとして受け止められている。この意味で、願望や危惧を表すにせよ、推定の表現であることから大きく離脱しているわけではない。

ところが、動詞は、人の意志により実現させ得る事柄を表現することも多い。こうした場合、「動-ないか₂」は、事実の推定ということとを離れ、相手の行為を誘発するための表現となる。

これ食べて見ないか？ (勧め)

そろそろ行かないか？ (誘い)

ちょっと手伝ってくれない？ (依頼)

もっとも、推定から誘導に至る間には、双方の性格を併せ持つと見られる中間的なものも認められる。

(君モ) 行って見たくないか？

ねえ、きれいだと思わない？

これらは、相手の考えや希望を尋ねているとも言えるし、それを特定の方向に導こうとしているものとも言えよう。

3.3 「形-ないか₃」「動-ないか₃」の用法に関しては、「名-ないか₃」の時と同様、三通りに分けて例示しておく。

先ず、反問や自問の用法がある。

本当にあの絵傾いてないか？

一度も会ったことがないか？

第二に、納得を表す場合がある。

(相手の発言を受けて) そうか、傾いてないか。

仕方ない、諦めるしかないか。

あれだけ練習しても勝てなかったか。

第三が、普通の発問の場合である。

(扉を開けようと四苦八苦している人に対して) 開かないか？

何も忘れ物はない？

(イイコトヲ教エテアルケド) 絶対誰にも話さないか？

(ソナナコトヲシテ) ちっとも恥しくないか？

そこで山田に会わなかったか？

ここに至って、「形-ないか₂」「動-ないか₂」との連続性が再び問題となるが、この点は問わないことにする。

「形-ないか₃」「動-ないか₃」は分析的な表現であり、上の例示で事足りると思われるが、次のように命令を表す用法だけは、慣用表現としての性格が強く、独立に指摘しておく必要がある。

さっさと片付けないか。

ただ、命令よりは催促の用法とすべきであろう。眼前の相手が行動を起こそうとしないのに接して、行動を促すという場合に限られるからである。これは、「*明日片付けないか」

が不可能であることから明らかであろう。(普通の命令文ならば「明日片付けろ」が可能であるという事実と対照的である。)この催促の用法は、強いて言えば、納得を表す「動-ないか₃」に近いものであると思われる。^{註9}

4 関連した問題

本節では、否定疑問文に関連した二つの問題に簡単に触れておく。

4.1 第一は、否定疑問文に対する応答における「はい」と「いいえ」の選択の問題である。例えば、

(i) 一度は行きたくないか₂?

(ii) 一度も行きたくないか₃?

という二つの否定疑問文に対する応答を考えると、行きたくないのであれば、(i)に対しては「いいえ、行きたくありません」、(ii)に対しては「はい、行きたくありません」という答になるであろう。逆に、行きたいのであれば、(i)に対しては「はい」、(ii)に対しては「いいえ」で答えることになろう。

この相違は、第三類の否定疑問文(ii)では、「ない」が否定辞本来の機能を果して「一度も行きたくない」という否定命題を形成している——そして答える側はこの否定命題に対する是認・否認の態度を「はい」「いいえ」で表現している——のに対し、第二類の否定疑問文(i)ではそうになっていないという事情に起因するものである。^{註10}

4.2 第二に、小論で述べたことから、外面上「二重否定」の形をしている——否定辞「ない」が反復して現れる——疑問文の意味のあり方は容易に理解されよう。要は、二番目の「ない」の働きが問題となるわけである。

第一類・第二類の否定疑問文では、「ない」の働きは否定辞本来のそれであるとは言えなかった。この「ない」が否定を表す「ない」と共起しても、結果は肯定にはならない。

何だ、壊れてないじゃないか₁。

それほど大きくないんじゃない₂?

こんな小さな字では読めたくないか₂?

表されているのは、壊れていない、大きくない、読めない、という否定的な内容である。

これに対し、第三類の否定疑問文にあつては、「ない」が否定の機能を発揮する。従って、否定辞「ない」を二度繰り返すことで、結果は肯定となる。例えば、

(「読めないだろう?」という話者の発問に対し、相手が「いや、そんなことはない」と答える。これを受けて) そうか、読めなく (㊦) ないか₃。

において表現されているのは、実質上、読めるということに他ならない。(「読める」と「読めなく㊦ない」とが意味において全同であるということでは勿論ない。)

5 結 論

念のために否定疑問文の下位類型のあり方を整理して示せば、次頁の図のようになる。第一類の否定疑問文を「甲種」、第二類・第三類の否定疑問文を「乙種」としておく。

(28) 否定疑問文小考

この小論では考察の範囲外とせざるを得なかった問題も多い。^{注1} 観察・分析も素描的なものであり、見落しや不備な点多々あろうと思われる。御批判、御叱正を頂くことができれば幸いである。

甲種	[体言、用言] ではないか ₁	(例) よう、山田じゃないか
乙種	[体言] ではないか ₂	どうもあの男犯人じゃないか?
	[形容詞] ないか ₂	この靴では少し小さくないか?
	[動詞] ないか ₂	あの絵傾いてないか?
	[体言] ではないか ₃	そうか、1は素数じゃないか
	[形容詞] ないか ₃	え? これがおいしくないか?
	[動詞] ないか ₃	絶対誰にも話さないか?

注1 小論で言う否定疑問文に関する論考で、見るべきものとしては、森田良行氏『基礎日本語1』（角川書店、1977年、339～343頁）、山口堯二氏『疑問表現の否定』（『国語と国文学』第61巻第7号、1977年）、仁田義雄氏『日本語疑問表現の諸相』（『言語学の視界 一 小泉保教授還暦記念論文集一』、大学書林、1987年）等がある。各々の詳細に立ち入って検討する余裕はないが、共通して、否定疑問文の形式面の分析が必ずしも十分でない——区別すべきものが区別されていない——ために、種々の機能の相対的な位置付けが不明瞭になっているように思われる。

注2 「かな（あ）」「かしら」等で終わる文も「疑問文」に含める。厳密には更に補足すべき事柄もあるが省略する。

注3 「～のではないか_{1,2,3}」の「の」が「のだ」の「の」と同一視すべきものであることは疑いを容れない。いわゆる「のだ」という表現形式——「のだ」「のか」「のではない」「のだらう」等より抽出される共通部分という意味において——の問題に関しては近く詳論を予定している。念のために付言しておけば、「壊れているんじゃないか_{1,2,3}」のような表現は、「壊れている」と「ではないか」の間に「の」が挿まれて成立する、といった理解は不適當である。正しくは、「本だ」が「本じゃないか」を生むのと同じ過程により、「壊れているんだ」から「壊れているんじゃないか」が生じるものと解釈すべきである。

注4 「山田じゃないか₁」では「ではないか₁」が体言に付くが、「た」を加えると「山田だったじゃないか₁」となる。つまり、「た」を伴わない場合に限って、「ではないか₁」が体言に直統するわけである。しかも、文体的な制約を受けはするが、「〇〇は××であるではないか」のように「である」を伴う言い方も不可能ではない。（この言い方に抵抗を覚える向きは、「(彼が市長デアルコトハ事実ダガ) 彼は(市長デアル前二) 一市民でもあるではないか₁」のように「も」を含んだ表現を考えられたい。)

このことから、「ではないか₁」は体言または用言に付くとする本文での一般化とは別の考え方として、「ではないか₁」は用言（適切には、いわゆる節）に付くのを基本とするものとし、「山田じゃないか₁」は「山田であるではないか」の如きもののいわば省略形として解釈することも考えられる。

ただ、これは「ではないか₁」のみならず「なら(ば)」「だらう」等の場合にも共通する問題であり（例えば、「山田(である)なら」対「山田だったなら」「危ないなら」「逃げたなら」にも同じことが認められる）、また、一方の解釈を積極的に選択する根拠とすべき事実が乏しいので、ここでは事実とその解釈の可能性を指摘するにとどめる。

注5 「そう言ったじゃないか₁」の意で「そう言ったじゃなかったか₁」と言い、「やはり山田だっ

たじゃないか₁」の意で「やはり山田(だった)じゃなかったか₁」と言うことが仮に可能であるとすれば、本文で述べた一般化は検討の余地を残すことになる。ただ、そうであるにしても、「ではなかったか₁」が稀な言い方であることに変わりはないだろう。

注6 「のか」の「の」も、明らかに、「のだ」の「の」と同一のものである。否定疑問文における「のか」に関しては議論すべき問題もあるが、ここでは省略する。

注7 他に適当な表現がないので、一種の慣例に従って「プロミネンス」とするが、適切な用語法ではない。と言うのも、「ない」に「プロミネンス」を与えるか否かは、話者の随意的選択に委ねられてはいないからである。強調や対比の目的で、文の所望の部分の発音を随意に際立たせる、典型的な「プロミネンス」とは性格を異にするのである。

なお、音調の表記法については川上藁氏の諸論考を参考にした。不適切な点があれば御叱正願いたい。

注8 水谷信子氏は、『日英比較 話しことばの文法』（くろしお出版、1985年）において「断定回避」の「遠慮表現」を論じる中で、

あまりおもしろくないんじゃないかと思われませんか。

で二番目の「ない」にプロミネンスを与える（外国人による）誤用の可能性を指摘しておられる（202～203頁）。

この観察自体に誤りはないが、本文を述べたように、「ない」にプロミネンスが与えられないという特性は「ではないか₁」および「ではないか₂」一般に共通するものであって、「断定回避」の「遠慮表現」に固有の問題ではないということに留意すべきであろう。（埋め込まれた否定疑問文は小論では扱わないが、上例中の「あまりおもしろくないんじゃないか」の部分が「ではないか₂」に相当することは明白であろう。）

注9 行為をするように相手に働きかけるものであることを考えると、催促の「動-ないか」は、勧めめや誘いの「動-ないか₂」と同類の表現であると考えられるかも知れない。

しかしながら、催促の「動-ないか」は、寧ろ、納得を表す「動-ないか₃」に近いと見た方がよい。「片付けないか」は、相手が片付けようとしぬ事実を受け、それを表現する否定表現「片付けない」に「か」を加えて表出するものだと思われるのである。（イ）先ず、眼前の相手に行動を促す形での命令に限られるという（本文で述べた）事実が、そうした見方——否定的事実を受けての表出であるとする見方——に符合する。（ロ）また、催促の「動-ないか」では「か」が省略できず、これも納得の「動-ないか₃」との類縁性を示唆する。他方、勧誘の場合には「行かない？」のように「か」を略した言い方が可能である。（ハ）更に、勧誘の場合だと、「行かないか？」から「ない」を除いて「行くか？」としても、やはり勧誘の表現が得られる。これに対し、催促であるためには「ない」を含んでいることが欠かせない。催促の「片付けないか」では、勧誘の「行かないか？」の場合と異なり、「ない」が否定命題の構成という否定辞本来の機能を果していると言える。（ニ）最後に、前項に関連するが、「これだけ言い聞かせても、まだわからないことを言うか」（この例は山口堯二氏の上掲論文より借用）のような文が可能であり、催促の「動-ないか」とちょうど対称的な機能を有する。即ち、眼前で行われつつある相手の行為を述べ、それに対する非難の感情——ひいては行為の禁止——を表現するのに用いられる。二者を同一の表現類型と見ることが妥当だとすれば、両者から「か」を抽出しさえすれば——即ち、「片付けないか」の「片付けない」の内部にまで立ち入らなくても——分析が完了することになる。つまり、催促の「片付けないか」は、通常の否定表現に「か」が付加されたものとして——即ち、「動-ないか₃」として——解釈されることになる。

ただ、厳密を期するためには、催促の「動-ないか」が最早典型的な「動-ないか₃」の地位を失い、慣用的表現としての独立性を獲得しているということも認めておかなければならない。

(30) 否定疑問文小考

と言うのは、「さっさと片付けな_いか」が、仮に、純粋な「動-ないか₃」であるとするならば、その構造は、

[さっさと片付け_{ない}] か

となるはずである。しかしながら、この構造は無理な構造([...]の部分)を含んでおり、認めることはできないのである。(2.5節を参照されたい。)

以上を要すれば、催促の「動-ないか」は、元来「動-ないか₃」なのであるが、固定慣用化を通じてその分析性を弱めているものと推定されるのである。(「元来」ということを積極的に主張するには通時的な考証が必要であろう。)

注10 否定疑問文に対する応答における「はい」「いいえ」の選択の問題に関しては、中右実氏による論考があり(『質疑応答の発想と論理』、『日本語学』第3巻第4号、1984年)、考察の方向は異なるが、ここに述べた内容と同じことが書かれている。ただ、惜しむらくは、中右氏の論考においては、氏の言われる「命題内容」と「モダリティ」の区別が僅かの場合について例示されるにとどまり、如何なる場合に否定疑問文の命題内容が否定(或は、逆に肯定)になるかという点に関して、分析・整理が行われていない。(それを欠いては循環論の謬りを免れ難い。)小論で示した否定疑問文の類別は、氏の分析が現に基本的に妥当であることを裏付けるものである。

因みに、「はい」「いいえ」は、問い手が如何なる答を予期しているかに応じて選択されるとする通説がある。即ち、問い手の予期する答を是認する時には否定文の形での返答であっても「はい」、問い手の予期する答を拒絶する時には肯定文の形での返答であっても「いいえ」が選択されるというのである。(この通説に関しては、例えば、久野暉氏『日本文法研究』(大修館書店、1973年)の第22章を参照されたい。中右氏がこうした通説に対して否定的な態度を表明しておられるが、氏の議論の範囲内においては、正当な理由のない批判であるように思われる。)

この見方は多くの場合に通用するが、相手の考えの妥当性に挑むような疑問文の場合には問題を生じる。例えば、「(1が素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ。)本当に1は素数じゃないか₃？」と怪訝そうに問う者にあつては、1が素数であるということの方に執着を感じているはずである。にも拘らず、問い手のそうした期待を拒絶する時でも、「はい」を用いて「はい、1は素数じゃありません」という返答がなされるであろう。これと方向は逆であるが同じことが、肯定疑問文の場合についても言える。例えば、「(2が素数ダト君ハ言ウガ得心デキナイ。)本当に2は素数か？」を考えて見ると、2を素数でないとする問い手の予想を裏切る返答を行う時でも、「はい」が選択されて「はい、2は素数です」のようになる。

このように、「はい」「いいえ」の選択には、問い手の予想を是認するか否認するか別の別によるとは言えない事情があることが分かる。「はい」「いいえ」の問題はなお議論の余地を残しているが、ここでは以上の指摘にとどめておく。

注11 中でも、第二類と第三類の否定疑問文の区別が問題である。ここでは両者の連続性の問題には立ち入らなかったが、これに関しては慎重な検討を要する。また、非分析的な否定疑問文の内部構造、成立根拠といった原理的な問題は、この小論の目的とする範囲を超えるものとして残る。更に、疑問文一般という立場からは、肯定疑問文と否定疑問文の使い分けの条件を見定めることが必要となるであろう。

—京都大学研修員—

(昭和62年8月7日 受理)

(昭和62年12月30日 改稿受理)